

納西族の家畜および環境認識

安室 知[※]

I. 納西族の家畜飼養

1 はじめに

納西族にとって家畜飼養は重要な生計活動のひとつである。ウシ・ウマ・ブタ・ニワトリが基本的家畜として飼われ、そのほかに立地する環境（生態条件）に応じて、ヒツジ・ヤギ・ロバ・ヤク・アヒル・ガチョウ・ハトなど多種多様な家畜飼養が行われている。その中には、ミツバチのようにまさにセミ・ドメスティケーションと呼ぶにふさわしい人為と野生との狭間において展開される飼養形態もある。

その特徴は、牧畜業として独立して営まれるものではなく、多分に農耕との複合関係の中で家畜飼養が行われることにある。ウシ・ウマなどの大家畜は農耕労働や運搬に用いることを主目的に、ブタ・ヒツジ・ニワトリなどの小家畜は農耕生活における自給的な肉や卵といった食料や毛皮を得ることを目的にしている。

また、現在、家計維持における家畜飼養の意味において最も重要なことは、繁殖させた家畜を売ることによって得る現金収入にある。とくにそうした意味においてブタは麗江盆地の平坦地・山間地を問わずナシ族にとって最も重要な家畜である。その他、ウシやウマのように子を買ってきて大きく育ててから売って利益を得ることも行われた。

こうしたナシ族の多様な家畜飼養のあり方について雲南省麗江盆地に暮らす一家庭を取り上げてその概観を示してみる。また、麗江盆地各地の家畜使用状況（94年9月調査）については巻末資料に示したとおりである。

2 調査の概観

(1) 調査地の概観

調査地は、雲南省麗江県太安郷天紅行政村の中の1自然村である汝寒坪村である。戸数約130戸（556人）の村で、住人のほとんどが納西族である。村は標高約3100メートルにある。麗江盆地の縁辺部の丘陵部にあり、麗江盆地にある納西族の集落の中では最も標高の高いところに位置する。

生業活動の中心は農耕である。村の総耕地面積は4850畝あり、一人当たり8.3畝と太安郷全体の平均4.8畝に比べかなり多い。しかし、農業収入（年間純収入）をみると太安郷全体では1人当たり537元であるのに対して、汝寒坪村では平均421元と100元以上も少ない。それは、高冷地

※横須賀市立人文博物館学芸員

にあるため土地生産性が低く、また主要な作物もジャガイモ・エンバク・ソバなどの高冷地でも栽培可能なものに限定されてしまうためである。

そうした農耕活動のかたわら、重要な生計活動のひとつとして家畜飼養が複合的に行われている。とくにこの村ではヒツジとブタは重要な家畜である。ヒツジは麗江盆地の平坦部（標高2300～2500）ではあまりみられず、標高の高いこうした盆地縁辺部の丘陵地がヒツジ飼養の中心となっている。汝寒坪村のヒツジ飼養の詳細については別稿（安室，1995）にも記したのであわせて参照いただきたい。

なお、ニワトリ、ウマ・ロバの記述は汝寒坪村の隣村である天紅村における調査データである。

(2) 調査家庭の概観

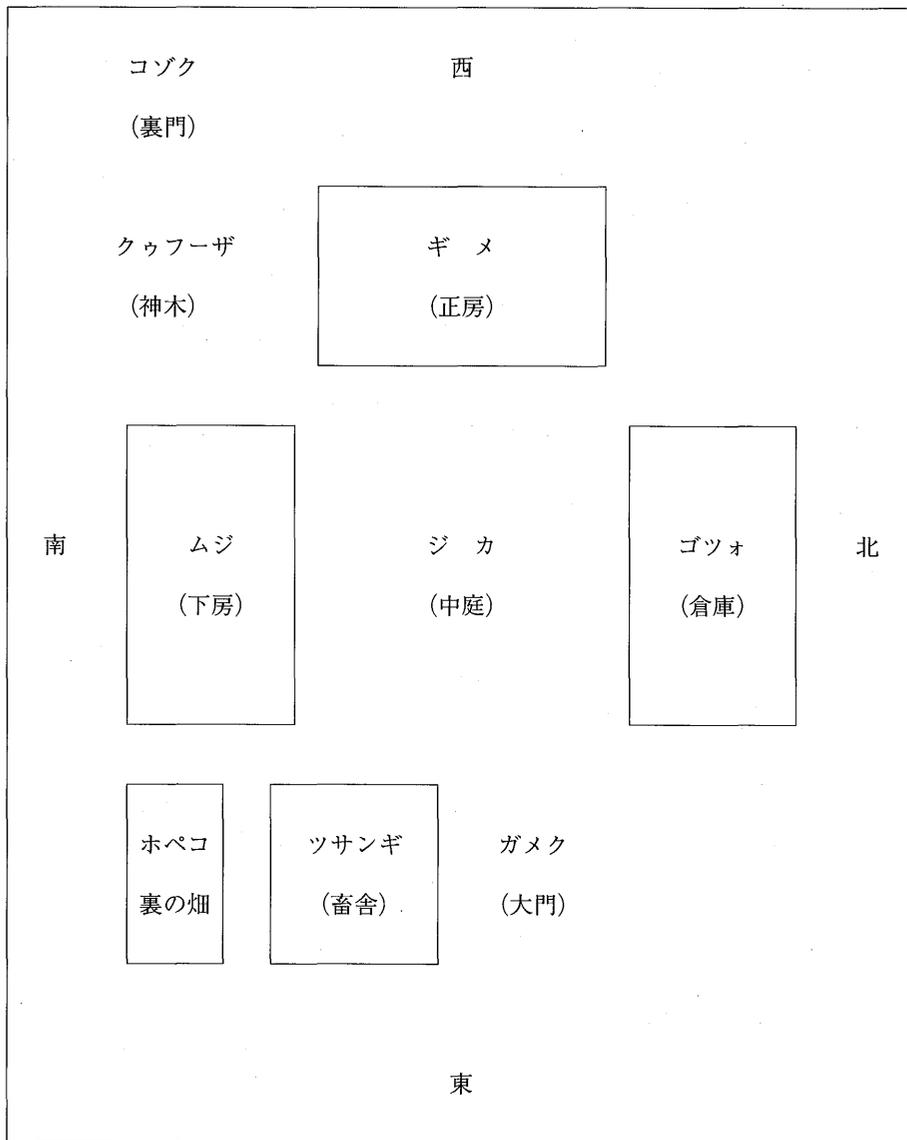
調査家庭は、楊自軍家である。家長の楊自軍氏は32才で、母親の紅每三（64才）および妻とふたりの娘と暮らす。5人家族である。

紅每三氏には、男3人女1人の計4人の子供がある。第2子が娘である。そのうち末っ子で3男の楊自軍氏と現在暮らしている。

楊家の家畜（95年9月12日現在）

- ・ブタ : 8頭（メスブタ3頭、子ブタ5頭）
- ・ヒツジ : 15頭
- ・ヤギ : 前にはいたが、今年はいない。
- ・ウシ（耕牛） : 1頭（オス）
- ・ニワトリ : 30羽
- ・ウマ : 村にはいるが、この家では飼っていない。
- ・ロバ : 村にはいるが、この家では飼っていない
- ・イヌ : 村にはいるが、この家では飼っていない。
- ・ハチ : 前にはいたが、今年はいない。

楊氏の屋敷の概略図は第1図に示したとおりである。家畜は屋敷東側のツサングと呼ぶ畜舎に飼われている。畜舎には、ギンバ（雨どい）があり、ギングウ（杉の木をくり抜いた水槽）に水が溜るようになっている。この水が家畜の飲み水などに利用されている。



第1図

3 ブタの飼養

(1) 飼い方

ブタは昼間は屋外に自由に放しておく。家の外に出ている、自分のブタを間違えることはない。ブタに印などはつけない。そうして放しておいても、夕方になると自分で家に戻ってくる。ブタは記憶がよい。

ブタの餌は木を削り抜いたボンゴと呼ぶ容器に入れてやる。

母ブタと子ブタは一緒の小屋にいれる。母ブタと子ブタとは、母ブタの次の出産の時に小屋を分ける。母ブタは出産2ヶ月後には発情するようになるため、そのとき子ブタは母ブタと離される。

* 白沙郷木都村の例 (94年9月時点)

畜舎 (ムボロ) の中

オスブタ (1)	メスブタ (2)	子ウシ (2)	メスブタ (1)	子ブタ (4)
-------------	-------------	------------	-------------	------------

メスブタ2頭と子ウシが同じスペースの中に入れられている。

また、子ブタがメスブタとは別の小屋に入れられている。

(2) 繁殖

この家にはメスブタが3頭いる。メスブタは1頭あたり、年2回、8頭から10頭の子ブタを生む。生まれた子ブタは生後60日ほどで売る。そのためメスブタを3頭持っていると同年間約1500元の収入がある。

かつて種付けは、自然にまかせていた。人は関与せず、ブタが外で自然のままに種を付けてきた。どこかには必ずオスブタがいた。また、交尾のためのオスを畜牧局に借りに行くこともあった。そのときは1頭あたり15~16元を支払った。なお畜牧局は1949年にできた。

1991年からは、個人が請け負って種付けを行うようになった。3社(合作社)の和国兵さんと楊世興さんである。ふたりはそれぞれ1頭ずつオスブタを持っていて、そこに4社の人々がみなメスブタを連れて種付けに行く。1回12元支払う。このふたりは種付けを仕事にしているわけではない。あくまで農業が主業で、種付けは余業である。なお、楊自軍家では種付け用のオスブタを飼ったことはない。

ブタは春と秋に出産が多い。出産は暑くても寒くても良くない。暑いと生まれてきた子ブタが下痢をするし、寒いと傷寒症(凍傷?)になってしまう。

(3) 去勢

生まれてきた子ブタのうちオスブタは3か月後には去勢して「年猪」とする。自家消費用のブタである。去勢をすると家畜はよく太り、また病気をあまりしなくなる。

去勢は専門の人に家まで来てもらって行う。その人は、村外の人で、金羅(太鼓、ドラ?)を叩いて村にやって来る。ブタ以外にも、ウシ・ウマ・ヒツジ・ニワトリの去勢も行う。

メスブタの場合は、計12回出産すると売ってしまう。12回出産した後に去勢(?)してしまうこともあるが、メスの場合は病気になることがあるのであまりしない。そうしたメスブタを子ブタをたくさん生んでくれたので、その家では殺さないで売る。殺せば悪いことがある。

(4) 利用

去勢したオスブタのうち2・3頭は自家でその年の内に食べてしまう。オスブタが多く生まれ自家消費に余るときには売る。ブタは180~200キログラムになったときに殺す。大きいと250キログラムにまでする。

ブタ肉は家の中に吊してハム状に乾燥させ保存する。またブタの内臓のうち腸は干してから食べたり、腸に血と米を入れて蒸して食べたりする。そのほかの内臓は塩漬けにして正月に食べる。ただし膀胱は食べず捨てる。

楊家では正月にブタを1頭殺す。その他はブタを殺す日はとくに決まっていはいない。白沙郷木都村のように、ブタを殺すのは、毎年農曆11月4日と正月大晦日の前日(12月29日)と決まっているところもある。ブタを殺す日は年に一度親戚が集まる日でもある。この日のためにご馳走を作り、また麗江でご馳走を買ってくる。

ただし亥年と巳年にはブタを殺さない。もし殺せば家畜に良くないことが起こるとされる。

ブタを殺すときは、山地のエンバクの収穫などと同じように、近所の親類や友人を頼んで共同で行う。こうした共同作業をポポという。ポポの時には来てもらった人(多いときは10人程度、少ないと5・6人)に朝昼晩の3食をもてなす。朝と昼はパパ、夜は飯と肉で8品の料理を出すことになっている。

(5) ブタ飼養に特化した地域の例

* 金山郷良美村美自増村における養豚

(話者) 和 礼南(74才)、楊 秀云(64才)

(調査年月日) 1994年9月24日

・養豚組織

1982年以前は村に2つの生産隊があった。34戸の農家がそれに加わっていた。82年以降には耕地生産請負制となり村に2つの合作社ができる。合作社は基本的に生産隊と同じである。村の合作社は、第7番社と第8番社の2つあり、それぞれ45戸、46戸の農家で構成されている。

以前、和さんは生産隊に属し、14頭のメスブタ(親ブタ)飼っていて、年間100頭以上の子ブタを生産した。

・日常の世話

一般にブタの世話は女の仕事である。和さんの場合は、足を悪くしてからブタの世話をするようになった。日常の管理や交尾の手助けなどブタ飼養に関する技術は誰に教わるというものではない。親のを見て手伝ううちに覚える。

・交尾

種付けはすべて自分で行う。人に手伝ってもらうことはない。ほぼ年2回行う。5か月の間隔をおいて子を産む。

発情の時期はメスブタによって違う。発情の見分け方には4つのポイントがある。餌をあまり食べなくなること。よく鳴き声を上げること。生殖器が大きくなること。涙が出てくること。

発情したメスブタの小屋にオスブタを入れてやる。メスブタとオスブタの交尾は小屋やダー(庭)などで自由に行わせる。人が手伝うことはあまりない。ただし、メスブタがまだ小さく、オスブタが大きいときには、メスの尾を手で持ちあげて交尾の手助けをしてやる。交尾の手助けに器具は用いない。一日に2回交尾は行われる。

一般に発情したメス1頭に対して、オスブタ1頭をあてがうが、同時に何頭かのメスが発情したときには、メスブタ複数に対してもオスブタは1頭である。発情したメスブタは同じ小屋に入れ、そこにオスブタを入れてやる。

オスブタは、生産隊に入っていた当時は、生産隊から借りてくる。メスブタの発情は3日間なので、メスブタが1回発情するごとに、3日間オスブタを借りてくる。必要に応じて何回でも借りてくる。

・出産

子を産む前(妊娠期)には、親ブタの栄養に気をつける。餌を充分与えるようにする。交尾後、105~110日すると子ブタが生まれる。1回の出産で子ブタは3匹から10匹以上まで生まれる。生まれる数にはかなりの差がある。

生まれる直前になると親ブタは自分でブタ小屋の下敷きになっている松葉などを集めてきてそこに横になる。これが生まれる直前の兆候である。

出産時に人が手伝うことはあまりない。外で出産した場合は子ブタを親ブタの近くに連れて行って置いてやったり、子ブタが下敷きを被ってしまったときそれを取ってやり体をきれいにすることぐらいである。出産そのものについてはなんら人は関与しない。ブタの出産に難産はない。たまに逆子のことはあるが、それでも人はなんら手助けすることはない。

なお、とくにブタの出産の祝いはない。

・産後

子を産んだ後、親ブタに、塩をよく焼いてから水で溶いて塩水を作り与える。塩水には血を取り除く効果があるとされる。生後15日間は子ブタには何も与えず、親ブタの乳だけで育てる。それを過ぎると、一日に3回小麦をよく煮たものを餌として与える。

・体の弱い子ブタ

生後体の弱いブタには、米(またはもち米)のお粥を与えたり、紅糖を水で溶いたものを与えたりする。子ブタが死にそうなときには村にいる経験深い年寄りを呼んできてみてもらう。村には獣医はいないが、こうしたブタ飼養に詳しい年寄りがいた。そうすると、年寄りは、1. 青参、2. 草果、3. スワンなどの薬草を用いて薬(1, 2を同じ鍋でよく煮てから、ごみを取り

除き冷やす。そこに3を細かく刻んで混ぜる)を作って子ブタに与える。そうして養生すれば、80%は治る。

・死んだ子ブタ

死んだ子ブタは決まった場所がありそこに埋める。集落から400~500メートル離れたところ(村内の端)にある人工の大きな穴に入れる。これは病気が他に広まらないようにするためのものであるという。今は子ブタが死ぬと、肥料としてリンゴの木の下に埋めるようになった。

なお、ブタは安産であるため、子ブタが死ぬことはあっても親ブタが死ぬということはない。和さんは何十年も養豚をやっているが親ブタが死んだことは一度もないという。

・生産隊以前のブタ飼養

基本的にブタの飼い方は生産隊以前もそれ以降も同じである。ただし飼う頭数が違う。和さんの家では、普通、メスブタ(親ブタ)を1頭、食用ブタ2頭、子ブタ(来年の食用ブタ)2頭の合計5頭を飼っていた。1年に自家消費するブタが2頭で、それ以上の子ブタは売ってしまう。

オスブタには生後2か月ものを用いた。昔は小さいブタのほうが活力があるから種付けには良いとされた。どの家にもオスブタがいたので、種付け用に他の家からオスブタを借りてきて交尾させた。オスブタは交尾が終わると、去勢してしまう。そうして2・3年飼って食用ブタにする。

去勢はウベカ(納西語)とよぶ専門家が行う。漢語ではサンチェン(馬善匠)という。ウベカに家に来てもらって去勢してもらった。ウベカはブタのほかにもニワトリの去勢も行った。昔は村に2・3人ウベカがいた。現在は7・8人いる。

4 ヒツジの飼養

(1) 飼い方

ウシとヒツジとは別の小屋に入れる。ヒツジ小屋はウシなどのはいる小屋に隣り合わせに作っておく。

ヒツジは毎日草を食べさせに3・4キロ離れたところに連れて行く。食べさせる草によって行く場所は違う。冬場は家の近くに行く。また冬は油菜の莢、燕麦の茎、白雲豆の葉・茎・莢、カブの葉などを飼料にする。

家族の数によって飼育するヒツジの数も決まる。家族が多いと、30~40頭飼う場合もある。また、所有する耕地の量によっても飼う頭数が違う。

ヒツジの糞は畑の肥料になる。そのため、ヒツジ小屋から糞を集めてかごで担いで持って行き畑に入れる。また11月ころには畑にヒツジを入れる。作物収穫後に残る葉や茎を食べさせる。ただし、畑は牧柵に囲まれていてヒツジは畑に作物の植えられている期間中は中に入れないようになっている。牧柵をツェコオといい、棘のある木を利用して作る。

隣村の天紅で聞いた話では、このあたりにはかつてオオカミがいてヒツジを襲った。また、ヒョウもいた。人はオオカミがいると弓や鉄砲で追い払ったという。そのため、かつてはオオカミが

らヒツジを守るためにヒツジを山に連れていくときには、イヌを2匹連れていった。このイヌは特別な訓練はしていないが、獵犬（ナシ語で、リュクという）であった。

草を食べに出かけたりするときリーダーとなるヒツジは、現在はザホワと呼ぶヒツジである。ザホワは人のいうことをあまり聞かない。一般に、名前をつけるのは、人のいうことをあまり聞かないヒツジである。

あまりいうことを聞かないヒツジや悪いことをしたヒツジは、コムといってしかる。コムとは、祭祀の犠牲のことで、つまり殺すという意味である。

オスのヒツジは種オスを除いてすべて去勢される。去勢をグマという。

(2) 利用

年2回ヒツジから毛を取ることができる。冬は1頭につき3両、夏は7両の計1頭当たり年に1斤の羊毛が取れる。毛を刈る時、一目見て雌雄がわかるように、オスの場合は前の毛を、メスの場合は背中毛を少し残して刈る。

羊毛はおもに自家用のマットを作るときに使用する。マット1枚に羊毛が7斤（約3.5キログラム）必要である。こうしたマットには「萬壽無□」などの紋が記される。マットは4人で共同して作る。一度に4枚作り、ひとり1枚ずつ分ける。

ヒツジは年に1頭の割で殺す。肉の一部は自家消費し、一部は売る。女のマントを作るときには2頭殺す。マントをひとつ作るのに2頭分の羊皮が必要である。

防寒用のコートは羊毛のフェルトで作る。男物をスゾといい、女物をユグメという。ユグがマット、メが女の意味。このコートは丈夫で、水が沁み込むと鉄砲の弾も通らないという。このコートは防寒用に屋外で着るだけでなく、寝る時に布団としても用いられる。囲炉裏の上に渡す木のことをツンタクというが、そこにかけて煙をあて燻す。そうすると防虫に役立つ。

女性の民族衣装は、ユグゾまたはユグノという。ユグノは黒い毛を使って作り、ユグゾは茶色い毛を使って作る。飾り、防寒、寝具、労働保護の役目を果たすが、現在は飾りの意味で使うことが多くなった。これには七つ星が付けられている。

なお、ヒツジの乳を食用に人が利用することはない。乳はあくまで子ヒツジのためのものである。また人が利用するほど取れない。

(4) ヒツジに関する儀礼

ヒツジは、8月15日以降は殺してはいけないとされた。ただし、9月9日はヒツジを殺す日であるとされる。

9月9日はナシ語でドトロという。ドトロとは「羊祭」のことで、日頃ヒツジを飼っている人達が集まってお祭りをする。この日はヒツジの肉をご馳走する。「羊祭」は、社の穀物貯蔵場所に集まって行った。村には4社あり、それぞれに集まる。現在は、そうした「羊祭」もなくなり、8月15日以降にヒツジを殺してもよくなった。

2月8日は「牧羊の日」とされる。この日は山神を祭って、ニワトリを殺す。山神は白沙にある。そのため白沙に向かって祈る。白沙は遠いので行くことはない。

これはヒツジだけに限らないが、神様を冒すと家畜に悪いことがあるとされる。たとえば、屋敷の正門からみて西南方向にはクフーザ(?)の木が植えられており、大切にされている。西南方向には神様がいるからである。そのためクフーザにある木は切ってはならず、また葉が落ちたりして汚れるといつも掃除して綺麗にしておかなくてはならない。またこの神様は恐ろしいのでお祭をし、正月には家長が酒・茶・線香を供える。なお南西に植える木は樹種は何でもよい。この家ではシュム(納西語)という木を植えている。村にはかつてこの木(樹種:シュンザ)が倒れた家があり、その家の家畜が病気になってしまった。そのため、その家の家長は祈りを捧げて新しい木を植えた。

5 ヤギの飼養

楊さんの家では現在ヤギは飼っていない。

ヤギとヒツジは一緒に飼う。数は、ヤギは少なくヒツジが多い。なぜなら、ヤギは木を食べ、ヒツジは草を食べるが、このあたりには木が少ないからである。

ヒツジとヤギは一緒に群れにする。混ぜておいても争いなどはない。ヒツジとヤギの混ざった群れでは、ヤギはリーダーになる。それにヒツジが従って歩く。

6 ウシの飼養

(1) 飼い方

この家のウシは7月に行われるローマ交流会で買ってきた。ローマ交流会とは家畜売買所のごとで1000年前からあるという。ローマ交流会はナシ語ではなく昔からこう呼ぶ。メスが子ウシを生んだ時にも、やはりローマ交流会に持って行って売る。

年老いたウシは売る。天紅村では目安として、ウシは10才ぐらいまで飼いそれ以降は売ってしまう。ウシの場合も、前述のブタと同様に、その家で長年働いてくれ年を取ったものは殺したりしない。殺すと悪いことが起こるからである。

また年老いたウシはグラベシと呼ぶ回族の商人が持ってくる子ウシと交換することもある。グラベシとは商売人の意味である。

油菜の莢、燕麦の茎、白雲豆の葉・茎・莢、カブの葉など畑の作物や草の一種のニュサァを飼料とする。餌はウーンゾーと呼ぶ木製の容器に入れてやる。

(2) 繁殖

この家ではメスを飼って繁殖させることはない。白沙郷龍泉村のように、メスを飼って子ウシを産ませて、それを売るところもある。

(3) 利用

ここではウシは犁耕に用いる。こうした犁耕に用いるのはオスだけである。メスは耕牛にしないので、この村にはオスが多い。

犁は2頭で引く。ウシを1頭しか所有しない家では近所の人と組んで犁耕を行った。ウシを1頭しか持たない人は、7月14日に組む相手を探しに行く。酒を1本持ってそうした人を訪ねていく。頼みに行く方がかならず酒を持っていくことになっている。そうした関係はとくに固定的ではない。仲が悪くなると変わったり、ウシ同士の気が合わなくて変わったりすることもある。

7月14日にそうしたことをするのは村の取り決めである。13日以前にそうした交渉をすることはできない。そうした取り決めは昔からで、国民党時代からそうであった。その日を納西語でサメシェルニという。サメシェルニとは7月14日という意味である。

なおここでは人がウシの乳を搾って利用することはない。

*金山郷太平村における犁耕

ウシで引く犁をドゥと呼ぶ。この辺りの土は硬く、機械では耕起できない。ウシも大きく力の強いものを2頭使う必要がある。そのため力の強いスイギュウをこの辺では使うこともある。通常の土地ならスイギュウは1頭で犁を引くことができるが、ここではやはり2頭必要である。

ドゥを用いる時期はおもに2期ある。ひとつは、農曆3～5月。3月は休耕明けの畑を耕してトウモロコシを作付けする。続いて4月から5月にかけては2毛作のコムギを刈った後を耕してやはりトウモロコシを植え付ける。コムギの収穫作業との並行作業であるため2か月間ほどかかってしまう。そして、もうひとつは、農曆9月～10月である。トウモロコシを刈って取ってそこを耕し、小麦と豆を植える。小麦と豆は畑に植えるが、作付の時期は豆の方が少し早い。

7 ニワトリの飼養（天紅村の和錫珍氏の場合）

(1) 飼い方

この家では10数羽のニワトリを飼っている。そのうち8羽がメスである。ただしニワトリは長くて5年間しか飼わない。

ニワトリはアンビで飼う。アンビとは、アンはニワトリ、ビは小屋の意味。

ニワトリはほとんど放し飼いに近い状態で飼っている。朝は日の出とともに自分で外に出ていき、夜は太陽が沈むと自分から小屋にはいる。

ニワトリには、朝と夕に1回ずつ餌を与えるが、そのほかは自由に歩き回って餌をとる。餌はエンバク、麦などどんなものでもよい。

(2) 産卵

メス1羽が100個前後の卵を生む。

メス1羽につき生んだ卵のうち12個を孵化させる。よいときは12個中10羽の雛がかえるが、良くないと2・3羽しかかえられない。1年のうちで3回に分けて卵の孵化を行う。18から20羽の雛

が孵化する。孵化には暖かいときがよく、冬はさける。

交尾や産卵は自由にまかせる。人が管理したり強制することはない。ただし、産卵場所は家畜小屋である。

雛の雌雄は、頭の大きさに判断する。オスは頭がメスに比べやや大きい。生まれてすぐに見分けがつく。

(3) 去勢

- ・ニワトリも去勢を行う。
- ・去勢したオスは自分の家で食べる。
- ・オスのニワトリは去勢しなくてもたいていは1年くらいで売ってしまう。

(4) 利用

孵化した雛は半年間育ててから、食べたり売ったりする。

孵化させる以外の卵は自家消費する。また、卵を売って、その金で飴・硝酸ソーダ・塩・ノート・鉛筆などを買う。売る場合は10個を一単位とする。

8 ロバの飼養 (天紅村 和錫珍氏の場合)

(1) 目的

ロバを2頭(メス1, オス1)飼っている。ロバは売買のために飼っている。運搬や農耕には使わない。この村ではロバの方がウマよりも多い。

(2) 売買

ロバはダゾ(生後2・3ヶ月)を買ってきてキンダ(2才)で売る。ローマ交流会で売買する。ロバの価格は、ダゾが800元、キンダが1500元。

ウマとロバとでは、価格はロバの方が高い。運搬にはロバのがよく働くためである。また、オスとメスとではウマ・ロバともメスの方が高い。

9 ウマの飼養 (天紅村 和錫珍氏の場合)

(1) 目的

この家ではウマは飼っていない。ウマは繁殖のために飼う。この村でメスウマを飼っているのは7・8戸である。

メスウマの種付けをゾフという。現在種付けは拉子郷に連れて行って行う。30元の費用がかかる。1982年以前は村内に種付けの場所が存在していた。

(2) 売買

ウマも、ロバと同じように、ゾク（生後2・3ヶ月）を買ってきてキゾ（2・3才）で売る。ローマ交流会で売買する。ウマの価格はゾクが7～800元、キゾが1400元。オスとメスとではメスの方が高い。これもロバと同様である。

9 イヌ（金山郷良美村美自増村での調査）

納西族はイヌが好きである。イヌには名前を付ける。名前はおもに毛色によりつける。

イヌは、狩り（猪狗）、留守番（看家狗）、ウマやヒツジの守護（牧羊狗）として使う。イヌ肉を普通は食べない。食べると目が見えなくなるという。

イヌが死ぬと竹籠（クウ）の入れて、人が背負って穴まで連れていく。そしてその穴に埋めて線香をあげる。イヌを葬る穴はウシ・ウマ・ブタを葬る穴とは別の特別な穴である。

新しい米ができると嘗新節（日は決まっていない）を行うが、そのときはイヌを尊って人が食べる前に必ずイヌに米を上げた。大晦日も同様である。

イヌとニワトリを納西族の人が大切に理由：大洪水があったとき天の神様が人とニワトリとイヌをひとつの箱に入れた。洪水の間、箱に入って浮かんで生きのびた。洪水が治まって箱から出てきたが、人はニワトリとイヌと一緒にならば何もなくとも生活ができる。

イヌが稲をもたらしたという話：イヌは稲があるところにいて寝ていた。そのイヌがナシ族の土地にやってきた。そのときイヌの尻尾に稲の種をつけてきた。そうしてナシ族に稲を初めてもたらした。

イヌにまつわる説話：ふたりの兄弟がいた。財産を分けるとき、1匹のイヌがいた。長男はいいらないといったが、次男はイヌをもらった。次男はそのイヌを使って畑を耕した。イヌを向こうにおいて人が呼ぶとやってくる。そうやって鋤を引いて耕した。長男はそれを知り次男のイヌを借りて畑を耕そうとした。しかし、イヌは役に立たず殺してしまった。次男は涙を流して悲しんだ。そして畑に穴を掘ってイヌを埋めた。そこから木が生えてきたが、次男はその木に手を突いて木を揺らしては涙した。そうすると、上から金が落ちてきた。長男はそれを知ると同じように木に手を突いて揺らした。そうすると木の上から犬の糞が落ちてきた。

* 資料（94年9月調査時点）

（調査集落） 麗江県白沙郷木都村

（話者） 趙 仄文（79才），趙 （68才）

（調査年月日）1994年9月19日

・ウシ : 4頭

子生みうし（メス）

1頭

労働力となるウシ (オス)	1 頭
まだ労働力として一人前でない若いウシ	1 頭
子ウシ	1 頭

- ・ウマ : 2 軒で 1 頭を共有
- ・ニワトリ : 平均で約 20 羽を飼っている。中には 50 羽以上飼っている家もある。
- ・ブタ : 10 頭以上 (子ブタを含んだ数)

メスブタ (子を産ませるブタ)	2 頭
その他のブタ (成ブタ)	5 頭
子ブタ	3 頭以上

1 頭の親ブタが 1 回の出産で 8 頭の子ブタを生む。年に約 2 回出産をするので年間 15・6 の子ブタができる。生まれた子ブタは売る。1 頭当たり 50~80 元ほどで売れる。

ブタの種付けをおこなう専門家が村に 3 人いた。獣医ではない。ただし、ウシの種付けは獣医が行う。

(調査集落) 雲南省麗江県白沙郷木都村

(話者) 和 文坤 (71 才), その息子 (戸主)

(調査年月日) 1994 年 9 月 20 日

- ・ウシ : 5 頭 (メスウシ 2 頭, オスウシ 1 頭, 子ウシ 2 頭)
- ・ニワトリ : 成鳥は 10 羽以上, 小鳥も 10 羽以上
- ・ウマ : なし
- ・ブタ : 9 頭 (メスブタ 2 頭, オスブタ 1 頭, 子ブタ 4 頭, 売るためのブタ 2 頭)

毎年 2 頭ウシを売る。2 頭で約 1500 元ほどの収入となる。

ブタの出産は 2 年間で 5 回ある。生まれる子ブタの半分は自家消費する。残る半分は売る。毎年 7~12 頭くらいを販売する。ただし今年はまだ 3 頭しか売っていない。今後 4 頭売る予定である。1 頭約 400 円で売る。

だいたい年に 2 頭のブタを自家消費する。ブタ肉は家の中に吊るして乾燥させ保存する。ブタを殺すのは、毎年、農曆 11 月 4 日と正月大晦日の前日 (12 月 29 日) と決まっている。

ニワトリは、自家消費のために、一番大きなオスを選んで大晦日に殺す。

(調査集落) 雲南省麗江県白沙郷龍泉村

(調査年月日) 1994 年 9 月 21 日

- ・ウシ : 2 頭
- ・ウマ : 1 頭 (メスウマ)

- ・ブタ : 5頭
- ・ニワトリ :
- ・ヒツジ : 少ない

この家で飼う牛は黄牛（耕作用のウシ）である。1戸あたり2頭飼っている。村にはメスウシを飼って子ウシを生産する家もある。

ウマはこの村では1戸あたり1頭飼っている。

親ブタは村で5・6戸だけが飼っている。普通の家では子ブタを町から買ってきてそれを育てる。この家で育てる5頭のブタは、4頭は売って、1頭は食べる。

ヒツジはこのあたりではあまり飼われない。山のほうで多く飼っている。

(調査集落) 雲南省麗江県拉市郷余楽村

(話者) 楊家剛, 李敬庚, 李建, 楊繼唐

(調査年月日) 1994年9月28日

(家畜)

- ・ウシ : たいていの家で飼っている。
- ・スイギュウ : 少数の家が飼っている。
- ・ブタ : たいていの家で飼う。
- ・ヒツジ : ほとんどの家で飼ったが、その頭数には幅がある。1・2頭の家もあれば数百頭の家もあった。多く飼う家は村に10戸ほどある。
- ・ヤギ :
- ・イヌ :
- ・ニワトリ : たいていの家で飼う。
- ・アヒル : 10~20羽。
- ・ガチョウ : 2~5羽程度。
- ・ハト : すべての家が飼うわけではない。70~80羽飼う家もあるし、飼わない家もある。

ウシは黄牛が多い。

スイギュウは畑の耕作用に飼う。

ヒツジには角ありと角なしがある。

ヒツジの飼料は、冬は屋内で農作物の殻などを与える。春から秋は屋外で放牧する。ただし夜は人が草を採ってきて与える。村の周辺の草だけでは足りないことと村の周りの草を大切にするために、9月から11月までの約3か月間は高山牧場に連れて行ってそこで放牧する。12月になると村に戻ってきて、村周辺の草を食べさせる。高山牧場は、村の西の方向にある竹の生えた山岳地で、標高3500~4000メートルのところにある。そこは共有地になっていて、誰が放牧しても良かった。

ヤギは黒ヤギを飼う。娘を嫁にやるときに使用。女の背中あてはヤギの黒い毛皮を用いて作る。

(調査集落) 雲南省麗江県金山郷良美村美自増村

(話者) 和 礼南 (74), 楊 秀云 (64)

(調査年月日) 1994年9月24日

(家畜)

- ・ウシ
- ・ウマ
- ・ブタ
- ・ヒツジ
- ・ウサギ
- ・ニワトリ
- ・ハト (舎鳥子)
- ・アヒル
- ・ガチョウ (鵞)

Ⅱ. 納西族の家畜認識

1 はじめに

先に検討したように、ナシ族における家畜飼養は基本的に農耕との複合関係のもと行われてきた。その成果を基礎におき、そのような家畜飼養を行ってきたナシ族の人々がいかに家畜を認識していたかを検討していくことにする。

ここに示した調査成果は、基本的に汝寒坪村 (自然村) における聞き取り調査をもとにしている。また、同じ天紅村 (行政村) に属し汝寒坪の隣村である天紅村 (自然村) の成果も併せてここに示した。

ナシ族における家畜の認識のあり方は大きく3段階に分けられる。第一段階は、多様な家畜群全体をいかに認識しているかという問題である。次の段階は、個々の家畜における分類の体系である。そして第3段階として、命名の体系があげられる。

第2段階の個々の家畜をいかに民俗分類するかという問題についていえば、その民俗分類の基本となるものは大きく3つの基準がある。ひとつが性であり、ふたつ目が性と関連する成長段階のあり方によるものである。そして3つ目が体色である。

性による分類においてはオス・メスの分類が基本になるが、オスの場合はとくに去勢の有無によって分類される傾向が強く、ナシ族の家畜飼養にとって去勢は大きな意味を持っていることがわかる。さらにメスの場合は、出産経験などによりオスに比べるとより細かな分類がなされている。また、体色による分類でいえば、その基本は白と黒の分類にある。それ以外の体色は雑とさ

れることが多い。

そして第3段階の命名の体系であるが、これはすべての家畜に当てはまるものではない。多様な家畜の中にはヒツジのように固有名詞が付与される家畜が存在する一方で、現在もっとも経済的に重要な家畜であるブタには固有名詞がない。このことを考えれば、固有名詞のあるなしの問題は一概に経済的な重要度を反映しているとはいえない。個々の家畜の歴史的な背景とともに、家畜の飼養形態の違いも、その問題には密接に関わってくる。また、ヒツジは確かに固有名詞を付与される代表的な家畜ではあるが、必ずしもすべての個体に命名されているわけではない。そこには命名されるヒツジとされないヒツジが存在する。これは家畜管理のあり方と密接に関わる問題である。

以下では、具体的に家畜ごとに示していく。

2 「家畜」の概念

ナシ語にも家畜を意味する言葉が存在する。ブタ・ウシ・ウマ・ヒツジなどを総称してそれをツサと呼ぶ。

ではツサの下の段階はそれぞれ種レベルの家畜になるかといえばそうではない。日本語にも、「牛馬」という言い方が存在するように、ナシ語にもヒツジとヤギを総称する言葉であるツイという言葉が存在する。これに関してはまだ調査が不十分なため、まだほかにもこうした言葉が存在する可能性がある。今回の調査で認識できたのはツイのみであった。

3 ブタの認識

(1) 分類

・性および成長段階

ブ (ヴォ) : ブタの総称。

ブヒ : オスブタ, 去勢したもの。

ブブ : 種オスブタ。若いオスブタのこともそう呼ぶ。

ナチュ : メスブタ, 去勢したもの。質が悪いとメスでも去勢した。

ザドゥ (ブメザドゥ) : 1回目の出産をした後, 去勢したメスブタ。

ブメ : メスブタ。去勢していない。まだ子供を産んでいない。

ババメ : 生まれたばかりのメスの子ブタ。

ババブ : 生まれたばかりのオスの子ブタ。

ムメ : 子ブタ (オス・メスともそう呼ぶ)。少し大きくなったもの。

ボモ (ムモ) : 年取ったオスブタ。10才以上。

ボムム (ムムム) : 年取ったメスブタ。10才以上

・色

ブノ : 黒いブタ

- ブパ : 黒白のブタ (白い部分が長い)
- ブシュ : 土黄色のブタ
- ブザ : 雑色のブタ

(2) 命名

ブタに名前をつけることはない。

4 ヒツジの認識

(1) 分類

・ヤギとヒツジ

ツイ : ヒツジとヤギの総称。

・性および成長段階

ユウ : ヒツジの総称。

ユレゾ : 生まれたばかりのオス (メスも?) の子ヒツジ。ゾは小さいの意味。

ユブ : 去勢したオスヒツジ

ユメ : 大きくなったメスヒツジ。メはメスのこと。

レニ : 大きくなったオスヒツジ, 種オスのこと。

ユム : 年取ったヒツジ。ムは老のこと。

レニム : 年取ったオスヒツジ。

ユメム : 年取ったメスヒツジ。

タメゾ : まだ子供を産んでいない, または妊娠中のヒツジ (?). タメはまだ未出産のという意味。また, タメゾには, 大人と子供の間の子ヒツジという意味もある。

ユレメ : 2回以上子供を産んだヒツジ, または母ヒツジのこと (?).

・色

ユノ : 黒い色のヒツジ

ユパ : 白い色のヒツジ

ユム : 雑色のヒツジ

(2) 命名

なお固有名詞については別稿 (安室, 1995) において示してあるので, ここではその補遺および訂正を行った箇所を示す。

- ・「ロホワ」 : 納西語の名前, ロは生まれつきの印の意味, ホワは色がついているという意味。首に色のついた毛のあるヒツジ。
- ・「ノティカ」: 納西語の名前, 首に線状に白い毛の生えたヒツジの意味。
- ・「ザホワ」 : 納西語の名前, ザは混ざっているという意味, ホワは色がついている意味。
- ・楊家で飼っている15頭のヒツジのうちリーダーは, 現在はザホワである。ザホワは人のいうことをあまりよく聞かないヒツジである。

・名前をつけるのは、人のいうことをあまり聞かないヒツジである。

5 ヤギの認識

(1) 分類

・性および成長段階

ツ : ヤギの総称。

ツクンズ: 角のあるヤギ。ツはヤギ, クンズは角の意味。

ツゾ : 生まれたばかりのヤギ。ゾは小さいの意味。

ツト : 子ヤギ

ツソ : 去勢したオスヤギ

ツメ : メスヤギ

・色

ツノ : 黒い色のヤギ

ツバ : 白い色のヤギ

ツム : 雑色のヤギ

(2) 命名

固有名詞はない

6 ウシの識別

(1) 分類

・性および成長段階

ウ : ウシの総称

ウメ : メウシ

子を産む前のメスと子を生んだメスも同様にウメと呼び区別はない。

ウフ (ウクォ) : オウシ

ウンドゥメ : メスの子ウシ

ウンドゥザ : オスの子ウシ

ウム : 年老いたウシ。ムは老いた意味。去勢ウシのことも意味する。

・色

ウゾ : 黒い色が主でそこに少し黄色が入っている。ゾは納西語であるが、意味は不明。

セバ : 白いウシ。セは不明, パは白の意味。

ウノ : 黒いウシ。ノは黒の意味。

ウンザ : 斑点のついたウシ。ザは雑の意味。

(2) 命名

ウシの名前は革の色によって名付ける。たとえば, 楊氏の家で飼う茶色のウシは, ツフと呼ば

れる。赤に近い色がついているという意味である。

7 ロバの認識

(1) 分類

・性および成長段階

- ダァ : ロバの総称
- ダゾ : 生後2・3ヶ月のロバ。ダはロバ、ゾは若いの意味。
- キンダ : 2才のロバ。キンは運搬の意味。

・色

- ダノ : 黒いロバ
- ダパ : 白いロバ
- ダシィ : 黄色いロバ
- ダシゥ : 赤いロバ
- ダンザ : 雑色のロバ

(2) 命名

固有名詞はない

8 ウマの認識

(1) 分類

・性および成長段階

- ゾォ : ウマの総称
- ゾク : 生後2・3ヶ月のウマ。
- キゾ : 2・3才のウマ。キは運搬、ソはウマの意味。

・色

- ゾノ : 黒いウマ
- ゾパ : 白いウマ
- ゾシィ : 黄色いウマ
- ゾシゥ : 赤いウマ
- ゾンザ : 雑色のウマ

(2) 命名

固有名詞はない。ただし、メスウマを飼って繁殖させている家では名前を与えている可能性はある。

9 ニワトリの認識

(1) 分類

・性および成長段階

- アン : ニワトリの総称
アバ : オスのニワトリ (去勢しないニワトリ)。アはニワトリ, バはオスの意味。
アゴ : オスのニワトリ (老若関係なくそう呼ぶ)
アメン : メスのニワトリ。メンはメスの意味。
アメブ : 卵を抱いたメスのニワトリ。ブは孵化の意味。
アム : 老いたニワトリ (3年以上のもの, ニワトリは5年までしか飼わない)。ムは古いという意味。

アムム : メスの老鳥

アパム : オスの老鳥

- アツ : まだ小さなニワトリ。アはニワトリ, ツは子の意味。
アツヅ : うまれたばかりの雛 (1ヶ月以内のもの)。ツは子, ズは若いの意味。
ドメバ : 生後1ヶ月の若いニワトリで, 羽根が生えてきた段階をいう。ドは羽ばたく, メは羽, バは出るの意味。アツヅの1ヶ月後。
アパヅ : 若いオスの鳥で, 一人前のオスの声を出すようになったもの, 鶏冠がはえだしたばかりのもの。
アラメ : 卵を生むばかりになったニワトリ。ラは生む寸前の意味。
シャキ : (漢語) 去勢オス。去勢オスに相当するナシ語の呼び名は存在しない。

・色

- アバ : 白いニワトリ (アメバ : メス, アババ : オス)
アノ : 黒いニワトリ (アメノ : メス, アパノ : オス)
アザ : 様々な色の混ざったニワトリ (アメンザ : メス, アパンザ : オス)

(2) 命名

固有名詞なし

10 イヌ

(1) 分類 *ほとんど未調査

リュク : 猟犬

(2) 命名 *ほとんど未調査

シャオホワ : シャオは漢語で小さいの意味, ホワは黄色い。

Ⅲ. 納西族の環境認識

1 気象・気候

(1) 季節感

・季節は、大きくムツとムズの2期に分けられる。春夏秋冬の表現はない。ムツ（ムズ）は寒い季節、ムズは暑い季節を意味する。

- ・ムズが来ると、キ（ナシ語）の白い花が咲く。なお、キの実を食べることができる。
- ・3月「土皇」になるとオケラ（？）がなく。この虫は穴におり、水を差すと出てくる。
- ・霜は8月末から9月に降りる。春は霜は降りない。
- ・このあたりの寒さは厳しく、「大雪」から「冬至」の間には寒さのために石が割れることもあるという。

(2) 雨

・5・6・7月に雨が多い。7月は夜によく雨が降る。7月の雨は昼間は霧雨で、夜は大雨である。この時期は昼間ベンキを塗っても夜のうちに落ちてしまう。

・霧雨は9月まで続く。ただし、昔はよく降ったが、今は天気が変わった。電気が来てから天候が暖かくなったという。

・むかしは9月に霧雨がたくさん降って、食べ物がなくなり種をいって食べたりした。また、山に木がなくなり、家屋（木口房）の材木をとって燃やしたりした。

・6月は雨期で、もしこの時期に木を切ると畑に水害があるため、6月は木を切ってはならない。これは村の決まりである。

(3) 雪

・このあたりは30センチほど雪が積もる。3月はまだ雪がある。

・雪は11月に降り始め、12月にもっとも降る。正月（春節）まで降る。12月に降った雪は深く、長く残る。2尺から3尺ぐらいもる。

・杠鵝花（ツツジ？）が多く咲くときには大雪が降る

・雪解けは立春の後である。

・雪が降る直前には候鳥がたくさん飛ぶ。

・立春後に降った雪は2日で消える。

(4) 農作業の目安

・雪解けの後すぐジャガイモの畑の土を耕す。ただし、畑では大雪が降っても5日間ほどすれば雪が解けてしまうため、農作業は行っている。

・杠鵝花（赤い花：ツツシ？）が咲いたら大麻を植える。

・清明節の後、畑にエンバクの種を蒔く。

- ・清明節の前後に白雲豆の種を蒔く。
- ・降霜のころに白雲豆を収穫する。
- ・4月芒種の前後に蘭花子の種を蒔く。
- ・11月までには、ジャガイモの収穫はすませてしまわなくてはならない。イモ（土？）が凍ってしまうためである。
- ・2月から3月にかけて30日ほど天気がよい。雪も雨もない時期である。
- ・この時期、エンバクを収穫した後の畑に火を付けて燃やす。
- ・また、この期間に松の枝をとったり、山に薪を取りに行ったりする。この期間にとった木はその家の1年間の燃料となる。小さなトラックで10台分くらいの量を集める。トラック1台で人力の20人分くらいの薪を運ぶことができる。
- ・木は水源林以外の村の共有山から取ってくる。6月まで取りに行くことができる。6月になると雹が降るのでいけなくなる。6月以外はいつ行ってもよい。
- ・主に松と栗を採ってくる。現在は栗が減り、松ばかりになっている。柳・桃・杠鶉樹は炊事には使えない。柳・桃は線香を作るときのもので、炊事には使わない。人が死んだときにもこの木を燃やす。
- ・こうした作業があるため、2月～3月にかけては遊んでいられない。一生懸命に働かなくてはならない。

2 空間・地形・時間

(1) 方位

- ・東西南北のうち東西方向が基準となる。
- ・東：納西語でニメト。ニメは太陽のことで、ニメトは日の出を意味する。
西：納西語でニメング。ニメは太陽のことで、ニメングは日の暮れることを意味する。
- ・南：納西語でイチム。イチは昆明のこと。ムは下を意味する。なお、他所ではナブという。意味は不明。
- ・北：納西語でホングロという。意味は不明、地名ではないかという。なお、他所ではバンジェンホという。意味は不明
- ・左右
右：納西語でイ。
左：納西語でワ。

(2) 耕地

- ・「糞地」と「山地」がある。*詳しくは農耕の項を参照

